名寄市病誌　5：94～95，1997

看護研究

～受傷から人工呼吸器装着のまま在宅療養へ～

在宅療養を躊躇する両親と在宅療養を希望する少年Ｙｕ君の看護

池田恵美　軽部博美　片井恵子　川原尚美
森口奈美貴　山田一美　坂本典子　高橋みさ子　益塚典子

1. はじめに

本事例は下校途中、交通事故に遭い、人工呼吸器装着となった。「自ら呼吸が出来るようにして欲しい」と切に願う両親と、「今この時を前向きに生きよう」とする患児との関わりを通して、試行錯誤の中、当院で初めて自宅での療養が可能となった事例を報告する。

2. 事例紹介

患　者：7歳　男児

診断名：下部延髄・頸髄損傷・遷延性無呼吸

経　過：平成6年5月、呼吸不全、昏睡状態で入院。気管カニューレ留置、人工呼吸器装着となる。徐々に意識回復、清明となる。リハビリ開始後、右上肢の機能回復し、筆記、食事摂取可能となる。

家族構成：両親、兄、祖父母と同居

家族関係：介護は主に母親。父親、両祖母が協力。

3. 看護の実際

Ⅰ　**急性期**（平成6年5月～7月）

〈問題となるもの〉

(1) 自ら呼吸できない。

↓

・恐怖心

・生命の危機感

(2) 言語的コミュニケーションがとれない。

(3) 家族と離れている不安。

図1.　クリスマスパーティー

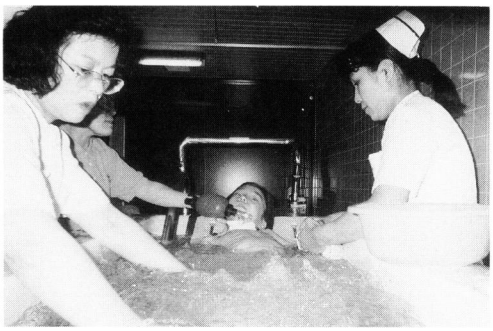

図2.　入浴

〈目標〉

(1) 舌打ち、カード、表情、まばたきにより、苦痛や不安を表現し相手に伝えることができる。

(2) 家族との時間を多くすることで安心感が得られる。

Ⅱ　**慢性期**（平成6年7月～平成7年10月）

〈問題となるもの〉

(1) 行動制限がある。

(2) 一日の過ごし方が単調で変化がない。

(3) ストレス解消ができない。

名寄市立総合病院　看護局

〈目標〉

(1) 車椅子での移動ができる。

(2) 入浴、散歩、季節の行事（花火、クリスマスパティー）等で喜びや楽しみを感じることができる（図1、図2）。

(3) 食事、排泄、筆記が自分でできる。

Ⅲ　在宅への移行期（平成7年11月～平成8年4月）

〈問題となるもの〉

(1) 両親は在宅＝治療中止と受け止め、無呼吸状態のまま帰ることに対する不満、不安を持っている。

(2) 在宅後、主に看護するのは母親となるため負担が大きくなることが予想される。

(3)大人に囲まれた単調な入院生活の中で、成長・発達に必要な学び・喜びを感じられる機会が少ない。

(4) 初めてのケースであり、各関係機関の協力体制が整っていない。

〈看護目標〉

現状を維持し、家族の中で最大限に能力を発揮し、子供らしく生活することができる。

実践：日課表、季節の行事、外出・外泊等、患児、両親、医師と共に計画し、行動拡大をはかった。家族の不安が軽減できるように気管内吸引、アンビューバックの使用方法、入浴の方法について指導した。

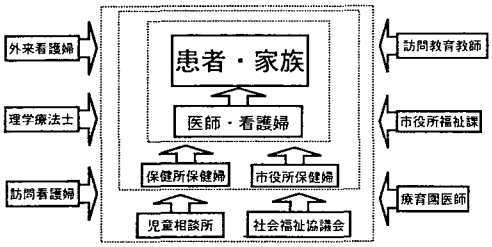

図3.　在宅移行準備チーム

4.　考　　察

在宅療法に難色を示していた両親も日課表作成や行事に患児と共に参加し、患児が笑顔で生き生きと生活しているのを目の当たりにする事により、考え方が変容し、患児を受け入れる準備をすすめていった。又、地域の関係機関の協力も得られ、平成8年4月退院となる。現在も一週間の支援スケジュールに沿って、リハビリ、外来に元気に通院中である。この事例を通して、その人らしく生活できる環境づくり、看護婦の調整的役割の重要性について再認識することができた。

ここで患者さんや家族の思いが表現されており看護上重要になると感じたので礼状を紹介します。

～Ｙｕ君の手紙～

僕がうれしかった事は、お風呂に初めて入れてもらった事です。初めてベッドの上ですわらせてもらった事、ベッドでの散歩、クリスマスパーティー、ミニバレーの応援、花火などいっぱいあります。

でも言葉がわかってくれなかった事が、くやしかったです。

～お母さんの手紙～

病室で我が子の姿を見た時には、今日という日が来るなんて考えられませんでした。

命が助かってほしいと願い続けた日々、少しでも動けるようになってほしい、色々な事を願い、泣いた事も数知れません。

重い障害を持って退院しますが、息子の頭の中では、何一つ入院前と変わる事なく、それ以上に夢や希望を一杯持ってます。

これからが大変ですが、皆様に助けていただいた命を大切に守って行きたいと思います。

～Ｙｕ君の担当医への手紙～

僕の命をたすけてくれてありがとうございました。リハビリと息の練習をがんばって、呼吸器をはずしたいです。声を出してみんなと話したいです。もっともっとなおして先生をビックリさせたいです。

5.　終　り　に

退院後もリハビリ呼吸練習を継続中だが、今後も成長に合わせた椅子、机、車椅子の準備、入浴方法の検討が必要となってきている。

また、本人の希望でもある、発声できる事、そして友達と共に学びたい、と言う事に向かって在宅支援チームで支援し続け成長を見守っていきたい。

本稿の要旨の一部は平成8年10月23日・24日に開催された第35回全国自治体病院学会に発表した。